

フルベッキ

—明治新政府の顧問に招聘され、日本の近代化に貢献した宣教師—
(史料集成)

岩崎洋三

1 はじめに

安政5年(1858年)に日米修好通商条約調印されると、翌年プロテスタント宣教師が初めて来日した。条約で1年後に神奈川・長崎の開港と、外人居留地内での外人の信教の自由化が決まったことで、アメリカのプロテスタント各派が一斉に日本に宣教師を派遣したものである。

しかし、開港はしたものの、外人居留地以外では明治維新以後も切支丹禁制が続けられたので、来日した宣教師たちの布教活動はままならなかった。一方、蘭学から英学への転換が急務だった幕府や諸藩は、競って宣教師を英語教師に雇った。このような情勢下長崎に着任した米オランダ改革派の宣教師フルベッキ¹は、幕府洋学校の英語教師に、そして佐賀藩洋学校には校長として雇われた。

フルベッキがこれらの学校で、長崎に集まった全国の俊才に、英語にとどまらず、聖書や米国憲法など幅広く教えたことが評判となり、多くの幕府や諸藩の指導者がフルベッキに学び、教えを乞うようになった。

それらの中から岩倉具視、鍋島直正、横井小楠、松平春嶽、大隈重信、副島種臣、勝海舟等が明治新政府の枢要のポストにつくと、フルベッキは彼らの推挙によって開成学校教頭、新政府顧問として東京に招聘された。そして、改正期限が迫っていた不平等条約の改正交渉と、そのための政治体制・法体系整備等について、フルベッキの該博な知識が頼りにされた。フルベッキは期待に応え、条約締盟国への岩倉使節団派遣、幕藩体制に変わる政治大綱・統治機構を定めた政体書や学制の制定、多数の海外留学生の派遣等々、明治初期の日本の近代化に貢献する多岐な活躍をした。

神学校を出たばかり、かつ無国籍の新米若年宣教師がここまで活躍しえたこと、また切支丹禁制下で攘夷派の過激な動きも収まらない中で、維新の指導者たちが、近代化を急ぐことが最重要としてキリスト教宣教師をここまで重用したのは共に画期的である。本リポートは、フルベッキの活動実績を辿り、フルベッキが活躍しえた背景をさぐるものとするものである。

2 プロテスタント宣教師の初来日

1) 米国プロテスタント教会三派が一斉に日本に宣教師を派遣

安政6年(1859年)に米国の聖公会²がリギンス³とC.W.ウィリアムズ⁴を長崎に、長老

¹ フルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1398) : 1859.11 長崎に着任。オランダ生まれで、22歳の時アメリカに移住しエンジニアとして就労。26歳で長老派のオーバン神学校に入学。在学中にブラウンの教会でドイツ人向け説教を手伝っていた。この年29歳で卒業と同時に、「3人目はアメリカナイズされたオランダ人」の選考基準に叶いオランダ改革派の日本派遣宣教師に選ばれた。William Elliot Griffis, *Verbeck of Japan*, Fleming H. Revell Co. 1900, pp. 48-62.

² 米聖公会 : Episcopal Church in the United States of America、独立戦争以前は英国国教会の一部だったものが、アメリカの独立後教会も独立した。キリスト教大辞典(改定新版)、教文館、昭和43年。

教会⁵がヘボン⁶を横浜に、オランダ改革派⁷がブラウン⁸とシモンズ⁹を横浜に、フルベッキを長崎に派遣した。

プロテスタント宣教師が日本に派遣されるのはこれが初めてのことだった。隣国中国には1807年以来欧米各国が宣教師を派遣し、それら宣教師の多くが日本布教機会を窺がい、日本語習得、聖書の日本語訳に努めていた¹⁰が、鎖国の壁に阻まれて日本への宣教師派遣は大幅に遅れていた。

2) 米プロテスタント宣教師一斉来日の背景

①タウンゼント・ハリスの来日と日米修好通商条約締結

1853年にペリーが浦賀に来航して日本の開国を促し、翌1854年(安政元年)再度来航

³ リギンス(John Liggins, 1829-1912) : 1859.5 長崎に着任。1856年に米聖公会から中国上海に派遣されていたが、病気療養を兼ねて長崎に転任し、7ヵ月後には帰国した。同人が担当していた在中国プロテスタント印刷所発行の中国語訳欧米文物の輸入頒布事業はフルベッキが引き継いだ。キリスト教人名事典、日本基督教団出版局、1986。大橋昭夫・平野日出雄『明治維新とあるお雇い外国人』人物往来社、1988、p.119。

⁴ C.W. ウィリアムズ(Channing Moore Williams, 1827-1900, 聖公会) : 1859.7 長崎に着任。1856年リギンスとともに上海に派遣されていた。1864年米聖公会の中国・日本伝道主教となる。1874年東京に移り築地居留地に立教学校(後の立教大学)を開く。(キリスト教人名事典-前掲-)

⁵ 米長老教会 : The Presbyterian Church in the United States of America、英国系の改革派(カルヴァン派)教会(キリスト教大事典-前掲-)

⁶ ヘボン(James Curtis Hepburn, 1815-1911) : 1859.10 横浜に着任。1836年ペンシルヴェニア大学医学博士、1841年宣教医としてシンガポールに赴任、後マカオ、アモイでも活動。シンガポールでギュツラフの日本語訳聖書を手入、日本語学習に参照する。1863年横浜にヘボン塾を開設。1887年明治学院を設立に私財を投入。ヘボン塾女子部は後にブラウン(註8)の弟子キダー夫人が受け継ぎ、フェリス女学院に発展する。1905年勲3等旭日章。『キリスト教人名事典』-前掲-。4

⁷ 米オランダ改革派 : Dutch Reformed Church in the United States of America、カルヴァンに連なるオランダの改革長老派教会。1568年から1648年まではオランダの公認教会だった。1628年アメリカのニューアムステルダム(現ニューヨーク)に設立された同派の教会がアメリカ・オランダ改革派の拠点になった。1766年にニュージャージー州ニューブランズウィックに設立されたクイーンズ・カレッジ(後のラトガース大学)は、本国に頼らずアメリカで聖職者を養成するために同派が設立したもので、神学校が併設されていた。『キリスト教大辞典』-前掲-。

⁸ ブラウン(Samuel Robbins Brown, 1810-1880) : 1859.11 横浜に着任。イェール大及びユニオン神学校卒。1839年中国マカオに赴任、モリソン記念学校(ギュツラフ夫人の私塾から発展)の初代校長に就任。ギュツラフ(註21)やヘボン(在シンガポール)とも交流があった。8年後夫人病気のため帰国。1851年から訪日するまでサンドビーチ教会の牧師を勤め、そこでフルベッキと出会った。横浜ではヘボンと同居し、日本語研究、伝道、聖書日本語訳等相互協力した。1869年にはキダー女史を伴い、新潟英語学校の教師として再来日した。1872年日本初のプロテスタント教会日本キリスト公会設立に寄与、1873年には横浜の自宅にブラウン塾を開設し、横浜バンドの中核として活躍した。この塾はヘボン塾などともに後の一致神学校・明治学院の母体になった。キダー女史は横浜ヘボン塾の女子部を引き継ぎ、フェリス女学院を設立する。校名は開校をサポートしたアメリカ・オランダ改革派外国伝道局創設総主事フェリス親子に因むもの。明六社会員。『キリスト教人名事典』-前掲-。

⁹ シモンズ(Duanne B. Simmons, 1834-1889) : 1859.11 横浜に着任。宣教医として来日したが、翌春には宣教師を辞し、医師に専念。一旦帰国後1870年フルベッキの斡旋で大学東校に奉職。同年福沢諭吉の発疹チフスを治療したのが縁で、1873年設立された慶応医学所の臨床講義を受け持った。同年神奈川県雇医に就任。駆虫剤セメンエンは同氏が創出した。『キリスト教大事典』-前掲-。

¹⁰ メドハーストは1830年に『英日・日英辞典』を、ギュツラフは1835年に日本語訳聖書『マタイ伝福音書』を、共にシンガポールの長老派印刷所で刊行している。古賀十二郎『長崎洋学史(上巻)』長崎文献社、昭和41年、pp.139-142。

して日米和親条約が調印されると、1856年7月タウンゼント・ハリス¹¹が初代米国総領事として、通商条約締結の使命を帯びて下田に着任した。着任2年後の1856年7月29日に日米修好通商条約(通称 Harris Treaty)が調印され、その条約第3条に神奈川・長崎・新潟の3港開港、第8条にアメリカ人の自国宗教信教の自由(free exercise of their religion)・居住地内での礼拝堂建設容認が盛り込まれ、宣教師派遣の道が拓かれた。ただ、外人居留地以外では切支丹禁制は継続された¹²ため、布教活動には制約があった。

②日本への宣教師早期派遣勧告

日米修好通商条約の調印が行なわれた米艦ポーハタン号に乗船していた S.W. ウィリアムズ¹³、ウッズ¹⁴、サイル¹⁵等3人の宣教師が連名で「日本宣教が急務であり、宣教師を早期派遣すべきである。」とする意見書を、米国の聖公会、長老教会、オランダ改革派教会の各外国伝道本部に送っていた¹⁶。フルベッキはこの3人と長崎着任直前に寄港した上海のブリッジマン¹⁷(アメリカンボード¹⁸中国派遣宣教師、「連邦志略」の

¹¹ **タウンゼント・ハリス**(Townsend Harris, 1804 - 78) : 1856年初代駐日アメリカ総領事として下田に着任。もともとはニューヨークの貿易商。1846年ニューヨーク市教育委員長を務め、フリー・スクールを創設したことで有名。引退後貿易商として清国滞在中日米和親条約締結を知り、大統領に直訴して総領事に指名された。敬虔な長老派(後聖公会)クリスチャン。『ブリタニカ国際大百科事典』TBSブリタニカ、1993。

¹² **切支丹禁制** : 明治新政府は、五箇条の御誓文の翌日に旧幕府の高札に代えて「五榜の掲示」を掲げるが、その第三札で「切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御制禁タリ」とした。『日本史事典』朝倉書店、2001 p. 558。

¹³ **S.W. ウィリアムズ**(Samuel Wells Williams, 1812-1884) : 1833年にアメリカンボード(外国伝道教会)が病気帰国したアヴィールの交代要員として中国に派遣した印刷技術を有する宣教師。広東・マカオの宣教印刷所でシナ学誌 Chinese Repository(ブリッジマン(註17)が創刊し編集長を勤めていた)の編集に従事した。ペリーに請われて1853年ペリー最初の日本訪問から米艦隊の公式通訳を務め、この時もポーハタン号に乗船していた。1837年に日本人漂流者を本国送還しようとしたモリソン号に、ギュツラフ等と共に乗船するなど日本への布教に関心が高かった。1877年帰国イェール大教授(中国語・中国文学。米聖書教会会長。『キリスト教人名事典』日本基督教団出版局、1986年、p. 187。

¹⁴ **ウッド**(Henry Wood, 1796-1873) : ポーハタン号艦付牧師(長老教会)、プリンストン大神学部卒。シリア、パレスチナの領事を経て、1858年艦付牧師になった。長崎寄港時や新見使節団渡米時艦内で日本人に英語を教授した。jpnhawaiiembassy1860.blogspot.jp/2010.07.01archive.html, accessed on Feb. 28, 2013。

¹⁵ **サイル**(Edward Syle, 1817-1890) : 米聖公会から中国に派遣されていた宣教師。1870年来日し、横浜の英領事館付牧師になる。明治7年から12年まで開成学校・東京大学で哲学・歴史学を教え、日本アジア協会会長も勤めた。明治13年離日。『キリスト教人名事典』一前掲一、p. 617。

¹⁶ Verbeck of Japan(前掲)p. 61。

¹⁷ **ブリッジマン**(Elijah Coleman Bridgman, 1801-1861) : 会衆派宣教師。1826年 Amherst College、1829年 Andover Theological Seminary 卒業、同年10月アメリカンボードからアメリカ最初の宣教師として中国・広東に派遣された。この派遣は1807年にロンドン外国伝道協会から最初のプロテスタント宣教師として中国に派遣されていたモリソンとキリスト教米商人からの強い要請に応じたものだった。1832年世界最初のシナ学の定期刊行物 The Chinese Repository を創刊し1847年まで15年間編集長を務めた。1838年「連邦志略」(Short Account of the United States) を出版。

著者) 邸で会っている。

日米修好条約締結の立役者で、外人居留地内の自国宗教信教自由化を勝ち取った米総領事ハリスも、条約調印後上海のミッション宛に書簡を送り、「日本伝道の機会が到来した。日本に派遣する宣教師は博識の人格者で、かつ教育・医療に殉じることのできる者を送ること」と要請し、その意見が派遣宣教師の人選に反映された。¹⁹

なお、職業外交官が数少なかったこの時代²⁰、現地語に長けた宣教師が通訳、外交官や官吏に登用される例が少なくなかった。アヘン戦争後の南京条約調印式にはギュツラフ²¹が英国の、望廈条約ではブリッジマンが米国の、日米和親条約及び修好通商条約では S. W. ウィリアムズが米国の公式通訳に採用されている。また、モリソン、ギュツラフは英貿易管理庁の China Secretary(民生長官)に、S. W. ウィリアムズは米国の代理公使にも採用された。

1847年モリソン、ギュツラフ、メドハーストと4人で聖書中国語訳を成し遂げた。この中国語聖書は太平天国の乱の指導者洪秀全に採用されたことでも有名。1844年の米中望廈条約調印式では公式通訳を務めた。(『キリスト教人名事典』(前掲)p.1318)

¹⁸ **アメリカンボード**: American Board of Commissioners for Foreign Missions. 1806年第2次大覚醒(註22)に触発され、海外布教の重要性を認識したウィリアムス・カレッジの大学生達が、卒業後会衆派(註23)の宣教師となって、1810年に組織した海外布教組織。1812年に長老教会と、1819年にはランダ改革派とも連携した。1829年会衆派宣教師ブリッジマンとアヴィールを、1823年 S. W. ウィリアムズを中国に派遣した。

(http://en.wikipedia.org/wiki/American_Board_of_Commissioners_for_Foreign_Missions accessed on Feb. 28, 2013)

¹⁹ 中西道子『タウンゼント・ハリス』有隣新書, 1993, p. 196.

²⁰ **職業外交官**: アメリカが清朝と望廈条約を結んだ1844年当時の国務省全体の職員はわずか15名、内外交課職員3名で、そのうち1名がアジア担当だった。加藤祐三『開国史話』神奈川新聞社、2008年、p. 43.

²¹ **ギュツラフ** (Karl Gutzlaff, 1803-1851) : ドイツ人宣教師。ドイツのヨハン・ヤニック宣教師養成所でモラヴィア主義者ヤニック校長の強い影響を受けた。1826年オランダ伝道教会からジャワに派遣された。同地で中国・日本に関心の深いメドハースト(註25)と意気投合、以後メドハーストと共にタイ、シンガポール、マカオ、香港を経て中国で多様な活躍をする。タイ滞在中に聖書のタイ語訳を、マカオでは、保護した音吉等日本人漂流者の助力を得て日本語訳を、中国では、モリソン、ブリッジマン、メドハーストと4人で聖書の中国語訳を分担した。1859年に来日するヘボン、1841年に宣教医としてシンガポールに派遣された時にギュツラフの日本語訳聖書を手し日本語学習に役立っていた。

モリソンを継いで、香港政庁の公式通訳として阿片戦争後の南京条約調印にも同席した。日本布教の関心も高く、1837年音吉等日本人漂流者を送還するモリソン号に、S. W. ウィリアムズと共に同乗し訪日を試みた。

後に英国特命全権公使として1865年来日するパークス (Harry Smith Parks, 1828-85) はギュツラフ夫人の甥で、ギュツラフが中山の治安判事時代に部下として働いていた。1849年ギュツラフが休暇で欧州に戻った際ザイストのモラヴィア派教会で中国伝道の講演をしたが、当時19歳のフルベッキはこれ聞いて感動し、後に聖職者になる決意をする重要なきっかけになった。ギュツラフ夫人がマカオの自宅で開いていた塾が、後にモリソン記念学校に発展するが、その初代校長を勤めたのがフルベッキと共に来日した S. R. ブラウンだったのも因縁だ。都田恒太郎『ギュツラフの周辺』教文館、1978年、pp. 39-60, pp. 191-223.

③ 欧米各国プロテスタント教会のアジア布教攻勢

宗教再生運動である大覚醒²²が起きると布教活動が見直され活発化するが、第2次大覚醒（1790-1840）の時には各国で海外伝道の組織化が図られ、各派が協力する体制が整った。そして、その主たるターゲットは人口の多い中国だった。

まず英国で、1795年にロンドン伝道協会が設立され、1807年に会衆派²³宣教師モリソン²⁴を中国に派遣して先陣を切った。1816年にはメドハースト²⁵をマラッカに送った。

次いで米国で、1810年に会衆派アマースト大学卒業生により American Board of Commissioners for Foreign Missions (アメリカンボードー註16ー)が設立された。1807年以来中国で孤軍奮闘していたロンドン伝道協会派遣宣教師モリソン（会衆派）の要請に応じて、1829年アビール (David Abeel, 1804-1846) とブリッジマン (註17) の2人を初の米人宣教師として中国に派遣した。ブリッジマンはシナ学研究誌 *Chinese Repository* を創刊し自ら編集長を務めた。1833年に病氣帰国したアビールの交代要員として印刷技術のある S. W. ウィリアムズ (註13) が広東に派遣され、*Chinese Repository* の編集を担当した。

英国に倣って中国伝道を模索していたオランダも、1826年にオランダ伝道教会 (NMS) を設立し、ドイツ人宣教師ギュツラフ (註21) をジャワに派遣した。

3 来日以前のフルベッキ²⁶

²² 大覚醒：The Great Awakening, 信仰復興(リバイバル)運動。主にアメリカで第1次(1734-50年)から第4次まで周期的に発生した。『キリスト教大辞典』(前掲)。

²³ 会衆派：Congregational Church、組合派とも。各個教会の会衆の自治と独立を教会政治の基本とするプロテスタント教会の一派。16世紀イギリスに起源を持つが、アメリカでニューイングランド地方の支配的教会になった。ハーバード、イエール、アマースト等多くの大学も設立。外国伝道と教育に熱心で、1810年代にアメリカンボードで知られる外国伝道団体を組織し、中国・日本に宣教師を多く派遣した。日本の会衆派教会は、アマーストに学んだ新島襄の同志社神学部卒業生が中心になって広めた。『世界大百科事典』平凡社、2007。

²⁴ モリソン：(Robert Morrison, 1782-1834) 会衆派牧師で中国プロテスタント伝道開拓者。1807年ロンドン伝道教会の中国宣教師としてマカオに着任。1809年英東インド会社通訳。1815-23『中国語辞書』、1822年中国語訳聖書『神天聖書』刊行。W.ミルンと協同でマラッカに英華書院開設。英広東政庁 Chinese Secretary。『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版会、1986年。

²⁵ メドハースト：(Walter Henry Medhurst, 1796-1857) 14才から英グロスターの印刷工場で印刷技術習得後、ロンドン伝道協会に応募し、1816年印刷技師としてマラッカに派遣され、モリソン等が同地に設立した英華書院でキリスト教教書の印刷と学校教育に従事。1818年宣教師になり、1822年バタヴィアに支部設立、日本語研究も開始。1830年英日・日英辞典をシンガポールで刊行。1842年上海に London Missionary Society Press (墨海書館) を開設、中国語訳聖書改定事業ではその中心になる。『日本キリスト教歴史大事典』(前掲)。古賀二郎『長崎洋学史(上巻)』長崎文献社、昭和41年、pp.139-142。

²⁶ 2から6のフルベッキの記述については、特に明記しない限り主に以下の資料を参照した。

・ W. E. Griffis, *Verbeck of Japan*, Fleming H. Revel Company, 1900.

・ 大橋昭夫平野日出雄『明治維新とあるお雇い外国人、フルベッキの生涯』新人物往来社、1988。

²⁶ モラヴィア兄弟団：ルターより百年も早く宗教改革を唱えた英国のオクスフォード大学教授で聖職者ウィクリフ (John Wicliffe, 1320-1384) が、イングランド王リチャード2世に嫁いだ、ボヘミアのヴァツラフ王の娘アンナがチェコ語訳聖書を持参したのに刺激され聖書の英語訳を決断し、聖書主義を広めた。ウィクリフの思想はヤン・フス (Jan Hus, 1369-1415、プラハ大学学長～破門後火

1) オランダ時代 (1830-1852、誕生から 22 才で米国へ移住するまで)

①プロテスタント国オランダのモラヴィア派²⁷の町ザイストで誕生

フルベッキは 1830 年オランダ・ユトレヒト近郊のザイストで誕生した。父親 (Carl Heinrich Willihelm Verbeek) は、ドイツ・オランダ系でルター派。富裕な商人で、ザイスト南東の Rysenburg 村の村長も勤めていた。母親 (Anna Jacomina Kellerman) は、イタリア系でモラビア派。新教を受容したためイタリアを追われ、信仰の自由のあるオランダに逃れて来た。フルベッキの伯母 Corneria Marie Kellerman は、ザイストのモラヴィア派の女学校 Moravian Young Ladies' School の校長を 30 年以上勤めた敬虔なモラビアンだった。

一族は、ドイツから来たモラヴィア兄弟団の監督ツィンツェンドルフ伯爵²⁸に、ザイストの用地を購入提供したファンラール家のコルネリユースや、オランダ東インド会社幹部社員が居る富裕な一族だった。

家庭内はドイツ語で、他にオランダ語、フランス語、英語にも通じていたが、オランダの良家では珍しいことではなかった。フルベッキは 8 人兄弟の 6 人目。フルベッキと弟、妹の三人はモラビア派の教会に通い、教会員としての所属を認められた。アメリカに移住していた妹セルマとその夫でモラヴィア派牧師のヴァン・デュールが、後にフルベッキをアメリカに招く。

オランダは、1568 年から 1648 年の間、カトリックのスペイン帝国と「八十年戦争」を戦って独立を勝ち得たプロテスタント国である。また、宗教的に寛容な伝統があり、ルター派、次いでカルヴィン派などカトリックに圧迫されたプロテスタントが数多くオランダに逃れて来た。ライデン大学は、この戦争でライデン市が勇敢にスペインに抵抗したことを国王から称えられ、創立が許され、その後カルヴァン派神学の中心になった。このライデン大学には、西周、榎本武揚、津田真道が留学している。また、シーボルトが日本から持ち帰った貴重なコレクションが収蔵されている。

ザイストは、1746 年にモラビア (又はボヘミア) 兄弟団の監督ツィンツェンドルフ伯爵がアムステルダム商人から土地を提供してもらい同兄弟団のセツルメントとして建設されたモラビア派の町で、町にはモラビア派の教会しかなく、ルター派の教会はなかった。フルベッキはこのモラビア教会の教会員でモラヴィア派の学校に通った。ザイストは現在でもモラヴィア派のセンターになっている。

刑死) や 100 年後の宗教改革に大きな影響を与えた。モラヴィア兄弟団はフスの流れを汲む共同体運動で早い時期から海外伝道に熱心だった。英国教会司祭のジョン・ウェスリーがメソジスト派を創始したきっかけはモラヴィア派との出会いだった。『キリスト教大辞典 (改定新版)』教文館、昭和 43 年。

²⁷ ツィンツェンドルフ伯爵: (Nikolaus Ludvig von Zinzendorf und Pottendorf, 1700-1760) ドレスデン生まれの貴族で敬虔主義者。1722 年ルター派のボヘミアからドイツに逃れてきたフス派モラヴィア兄弟団に、ツィンツェンドルフ伯爵は自分の敷地を提供して保護し、1737 年には自身がモラビア兄弟団の監督になった。伯爵は Pilgrim Count と称され海外布教にも熱心で、1732 年西インド、1733 年グリーンランド、; 1735 年北米インディアンに宣教師を派遣した。1741 年米国で Benjamin Franklin と、1749 年英国で Sir. Thomas More と交流があった。『キリスト教大辞典 (前掲)』。

② モラヴィア派の学校を経て、ユトレヒト工科大学に進学

フルベッキは、地元ザイストのモラヴィア派の学校で学んだ後、ユトレヒト²⁹の工科大学で製図や機械工学を学んだ。この時代は欧州に鉄道が普及し始め、オランダでも1839年9月にアムステルダム～ハーレム間が開通したのを踏まえ、家族会議でフルベッキは鉄道エンジニアを目指すことになった。

③ 中国伝道士ギュツラフの講演を聞いて感動

フルベッキは1849年（当時19歳）ザイストのモラヴィア教会で、一時帰任中の中国伝道士ギュツラフの講演を聞いて感動し、後に移住先米国で宣教師になる決意をするきっかけになった。

2) アメリカ時代（1852-1859、22才で米国移住後、29才で日本へ赴任するまで）

① アメリカに移住、グリーンベイクの鋳物工場で働く

ユトレヒトの工科大学を卒業後の1852年22才の時、フルベッキは、ニューヨークに住む妹セルマの夫でモラヴィア派の牧師であるヴァン・デュール³⁰の招きでアメリカに移住した。ヴァン・デュールもアメリカ移住で世話になったモラヴィア派のタンク師³¹の招きで、同師が自費でウィスコンシン州グリーンベイクに拓いたモデルタウンにある船舶機器鋳物工場にエンジニアとして就職した。この時フルベッキは、「良きヤンキー」になる覚悟をして、Verbeek という名前をアメリカ人に馴染むVerbeckに変えた。

③ 南部アーカンソー州ヘレナの建設技師に転職

田舎の鋳物工場に飽き足らなくなったフルベッキは、1853年（23才）南部のアーカンソー州ヘレナに移り土木工事の技師として働く。しかし、同地の農場で酷

²⁹ ユトレヒト：ザイストの西数キロの隣町、首都アムステルダムの南30キロに位置し、8世紀からオランダの宗教の中心地。オランダ最大のユトレヒト大学がある。陸軍軍医学校もあり、1857年に長崎の医学伝習所で、日本で初めて体系的な西洋医学を講義したオランダ海軍軍医ポンベ（Ponpe van Meerdervoort、1829-1909）や、その後任のボードウィンはそこで学んだ。

³⁰ ヴァン・デュール（George Van Deurs、1825-1906）モラヴィア派牧師。デンマークに生まれ、1839年モラヴィア派の町クリスチャンフェルドのMoravian Academyを卒業。1854年フルベッキの妹Selmaと結婚。タンク師（注31）の招待でアメリカに移住。1862年フルベッキをアメリカに招聘。

³¹ タンク師（Nils Otto Tank、1800-1864）：父はノルウェーの貴族で首相も勤めた。母は裕福な地主の娘で敬虔なモラヴィア派信徒。英国のモラヴィア派の学校等で学ぶ。1838年モラヴィア派の学校教師マリアンとヘルンフォートで結婚する。ヘルンフォートはツィンツェンドルフ伯爵が、ボヘミヤ

か

ら逃れて来たモラヴィア兄弟団に、自分の土地を提供して同派のセツルメントとし、後に自身がリーダーになったドイツにおけるモラヴィア派の拠点。マリアンの父は同所の学校の監督官で、後にオランダのザイストにモラヴィア派の女学校を創設した人物。1842年オランダ領スリナムに宣教師として派遣されるが、植民地の悲惨な状況に同情し、奴隷解放を訴えた。1849年キャロラインと再婚。彼女はマリアンとザイストのモラヴィア派女学校同級生で、父はアムステルダムの高名なプロテスタント宣教師で資産家。莫大な遺産を引き継いだ彼女の持参金を持って渡米、ウィスコンシン州グリーンベイクに800エーカー（97万坪）の土地を購入し、モラヴィア派のモデルタウンを建設した。フルベッキの妹夫妻をアメリカに招いたのもタンク師だった。伊藤典子『フルベッキ、志の生涯』あゆむ出版、2010年、pp. 36-43。

使される奴隷を見ていたたまれず、ビーチャー牧師（Thomas Beecher、1824-1900、「アンクルトムの小屋」の作者ストー夫人の弟、マーク・トウェインの友人）の奴隷解放説教を聞くために遠路を通っていた。1854年24歳の時重症のコレラを病み、生還したら聖職者になる決意をしてヘレナを去った。

④ 聖職者をめざしニューヨークの神学校に入学

妹夫婦のいたタンクタウンに戻って静養後、1856年9月（26才）ニューヨーク州にある長老教会のオーバン神学校に入学する。同校には義弟のヴァン・デュールが先んじて入学していた。在学中、改革派ブラウン牧師のサンドビーチ教会で助手として、ドイツ系移民の説教などを行なった。この中国伝道経験豊かなブラウン牧師との出会いが、フルベッキ来日の直接のきっかけとなった。また、この教会には3人の女性（マリア・マニオン、メアリー・キダー、キャロライン・アドリアンヌ）が宣教師になる勉強をしていた。フルベッキは日本赴任決定後マニオンと結婚した。キダー夫人は10年後にブラウンが新潟英学校教師として2度目の来日をする際同行し、後に横浜でヘボン塾女子部を受け継ぎ、フェリス女学院を設立する。アドリアンヌは中国福音伝道士になった。

⑤ 米国オランダ改革派の日本派遣宣教師に選ばれる

フルベッキは、1859年に29才で神学校を卒業と同時に、米国オランダ改革派が日本に派遣する宣教師に選ばれた。中国宣教経験豊かなブラウン、医師のシモンズに次ぐ、3人目の宣教師は「アメリカ化されたオランダ人」であるべしとの選考条件に叶ったためである。3月22日長老教会で按守礼を受けて長老派の牧師になり、翌日オランダ改革派に転籍した。

なお、この時3人の宣教師を選考したアメリカ・オランダ改革派外国伝道局創設総主事フェリス³²と、1865年から2代目総主事になる息子のフェリス Jr.³³は、フルベッキが斡旋する多数の日本人米国留学生の受入窓口となり、不足資金・下宿の世話から、海軍兵学校への入学許可取付のための米国政府・議会工作まで**献身的な協力を惜しまなかった**。この好意に対しれに対し岩倉使節団特命全権大使岩倉具視と同副使大久保利通は、1872年8月（陽暦）米国を去る際に、フェリス Jr. をボストンの領事館に招き、連名で感謝状を贈った。

³² フェリス（Isaac Ferris、1798-1873）：1816 コロンビア大学を主席で卒業、1820年オランダ改革派のニューブランズウィック神学校を卒業し、同派牧師になる。1852年ニューヨーク大学総長に就任し大学の財政危機を救い、大学の名声を高めた。1858年に創設されたオランダ改革派外国伝道局初代総主事。1859年ブラウン、シモンズ、フルベッキの3宣教師を初めて日本に派遣。『日本キリスト教大事典』（前掲）。

³³ フェリス Jr.（John Mason Ferris、1825-1911）：Isaacの息子。1843年ニューヨーク大学、1849年ニューブランズウィック神学校を卒業、牧師になる。1865-83オランダ改革派外国伝道局二代目総主事として、フルベッキが斡旋する多数の日本人米国留学生をラトガース大学等に受入れ。グリフィスやジェーンズ等のお雇い外国人の日本派遣にも尽力。『日本キリスト教大事典』（前掲）。

4 日本赴任（1859年5月ニューヨーク発、11月長崎着任、29才）

在米7年の間にオランダ国籍を喪失していたフルベッキは3月28日に米国市民権を申請したが、米国移住後の手続きが不備として却下され、無国籍のままの日本赴任になった。4月18日にマリヤ・マニョンと結婚、3週間後の1859年5月7日ニューヨーク港からサプライズ号で慌しく出航した。

まだスエズ運河もパナマ運河も開通していない時代、喜望峰、インド洋、ジャワ島、香港と地球を4分の3周する東廻航路は、最終寄港地の上海まで157日を要した。この間洋上では毎日日本語、オランダ語等の学習が行なわれ、フルベッキはブラウンから200語以上の日本語を習得した。

8月23日到着した香港には、船舶修理のため約1ヶ月滞在した。1839年から8年間中国伝道に従事したブラウンにとっては香港は馴染の土地でもあり、米国浸礼派教会のウィリアム・アシュモア師等やスコットランド、ドイツ、英国の伝道団と交流した。

上海には10月21日到着し、アメリカン・ボードが1829年に米国最初の宣教師として中国に派遣したブリッジマン博士の家で、米国プロテスタント各派外国伝道本部に日本への宣教師早期派遣を勧告した3人の宣教師と会った。1853年と翌年のペリー艦隊2度の訪日に公式通訳として随行していたS.W.ウィリアムズの日本情報は貴重だった。

5 長崎時代（1859（慶応6年）29才-1869（明治2年）39才）

1) 長崎着任、宗福寺³⁴境内に居を構える

フルベッキは1859年（安政6年）11月5日に上海を出港し、同7日夜長崎に着いた。先着していたアメリカ聖公会C.M.ウィリアムズ（S.W.ウィリアムズとは別人）とJ.リギンスに出迎えられ、2人が住む宗福寺の広徳庵に同宿する。宗福寺は、1848年捕鯨船の遭難を装って北海道利尻島に密入国したラナ・マクドナルドが捕らえられ本国送還まで半年間留置されたが、長崎奉行の要請で14人の通詞に英語を教え日本最初の英語教師になった「英学発祥の地」である。通詞の一人森山栄之助は後にペリー来航時の日本側通訳を勤めた。

フルベッキは着任早々日本語習得に並々ならぬ努力をし、1年後には英日文法書を上梓できるまでになった。後に東京で聖書日本語訳委員として担当した旧約聖書詩の日本語訳は日本の文学者が参考にするほどで、フルベッキの日本語は日本人に見劣りしないものだった。

³⁴ 宗福寺：中国福建省出身の華僑が1629年（寛永6年）創建し、同省から僧超然を招聘して開基した黄檗宗の寺院。なお、ここに留置され、日本最初の英語教師になったマクドナルドが日本行きを決意したきっかけは、知多半島から江戸に向う千石船で遭難し、太平洋を11カ月漂流後、1834年にアメリカの西海岸に漂着した音吉等3人の日本人漂流者と遭遇したことがきっかけだった（マクドナルドの父親は音吉等を救助したハドソン湾会社の幹部だった）。後に英国政府の依頼でその音吉名等をマカオで保護したのが宣教師のギュツラフであり、そのギュツラフの講演をオランダのザイストで聞いたことがフルベッキが宣教師を志すきっかけになったのも因縁だ。古賀十二郎『長崎洋学史（上巻）』長崎文献社、昭和41年、pp.147-156.

2) 当時の長崎の状況

①開港、しかし切支丹禁制続行

1858年の日米修好通商条約等安政5カ国条約により、外人居留地内での自国宗教の信教、礼拝堂の設置が認められた。これを受けて、パリ外国宣教会のプティジャン神父は1864年(元治元年)長崎のフランス人居留地内にカトリック教会浦上天主堂を建てる。しかし、そこに隠れ切支丹が参集(「長崎の信徒の発見」)したことが発覚して、1867年(慶応3年)「浦上四番崩れ」と呼ばれる隠れ切支丹3404人を一斉流罪に処する大弾圧が起きる。フルベッキ長崎着任8年後のことだった。

切支丹禁制の高札が撤去されるのは、岩倉使節団訪欧中の1873年2月まで待たねばならず、フルベッキ長崎在任10年間の布教活動はままならなかった。

② 全国の俊才が数多く遊学する長崎

唐蘭文化の学都長崎には、新しい時代の文化の担い手を志す有志が全国から数多く集まっていた。1850年以降だけでも吉田松陰、福澤諭吉、勝海舟、榎本武揚、長与専斎、伊藤博文、高杉晋作、坂本竜馬、木戸孝允、西郷隆盛、後藤象二郎、大隈重信、副島種臣、松方正義、佐々木高行、大村益次郎、小松帯刀、五代友厚、寺島宗則、森有礼、陸奥宗光、前島密、西周、井上馨、岩崎弥太郎、西園寺公望等々幕末・維新に活躍する人材の多くが長崎で訪れていた。1855年に設立された長崎海軍伝習所にも、幕府伝習生75名の他諸藩の伝習生128名が集まった。江戸時代を通じて1433名が長崎に遊学し、19世紀以降だけでも686人に上るとの試算がある。³⁵

③ 蘭学から英学への転換

1808年のフェートン号事件³⁶で、警備体制の不備から失態を演じた長崎奉行や1640年代以来長崎警護(長崎御番)の役割を担う福岡藩・佐賀藩等はオランダ語の限界・英語の必要をいち早く痛感していたが教師に恵まれなかった。

1848年に漂流を装って北海道利尻島に密入国し捉えられたラナ・マクドナルドを、本国送還までの間英語教師として雇いオランダ通詞14人を教えさせることから始め、その後来日する宣教師を格好の教師として雇った。1858年に日米修好通商条約が結ばれると、幕府は英語に特化した長崎英語伝習所を設立した。

3) 長崎におけるフルベッキの活躍

① 切支丹禁制下での布教活動

切支丹禁制下での布教活動はままならなかったが、フルベッキは自宅で秘かに聖書研究会を持ったり、時には信者を洗礼することまで行なっていた。大隈重信や副島種臣もフルベッキの自宅等で一年半に亘って聖書の勉強をしていた。後に大隈重信が切支丹禁制についてパークスとの論争に太刀打ち出来たのはこの体験が奏功した。

1865年5月には、佐賀藩家老村田若狭が実弟村田恭とともにフルベッキから洗礼を

³⁵ 平松勘治『長崎遊学者事典』(溪水社、1999) pp.409-412.

³⁶ フェートン号事件:文化8年(1808年)オランダ船拿捕のため、オランダ国旗を掲げて不意に長崎に入港した英艦フェートン号を駆逐できず失態を演じた長崎奉行と警護担当の佐賀藩家老が切腹、佐賀藩主も100日間閉門の処罰を受けた事件。『キリスト教大事典』(前掲)

受けた。前年 11 月横浜で洗礼を受けたヘボンの日本語教師矢野元隆以来、日本で 2、3 番目の受洗者であった。村田若狭は 1854 年の日米和親条約締結後、幕府の沿岸警備強化方針に沿って藩主鍋島直正の命で長崎に派遣されたが、その時の部下が拾った聖書に興味を持ち、来日直後のフルベッキを通して漢訳聖書（新約はモリソン訳、旧約はミルン訳）を入手し、部下や弟にも学ばせていた。

② 英学教師として多数の人材を育成

門下生や出入りした人物には大隈重信・副島種臣・江藤新平・大木喬任、伊藤博文・山口尚芳、高杉晋作、小松帯刀、西郷隆盛、西郷従道等錚々たる名があり、フルベッキの活躍の場が広がった。その博学振りと面倒見の良さが長崎に集まった英才を通じて全国に評判になり、10 年後には、太政大臣三条実美から、開成学校教師兼政府顧問として東京に招聘される。

[自宅私塾]

自身の日本語学習と英語教授をバーターでやることから始まった自宅私塾には、長崎通詞や薩摩・長州等他藩の藩士も訪れていたが、その評判が幕府洋学校教師に迎えられきっかけになった。

[幕府洋学校済美館]

幕府は安政 5 年（1858 年）日米修好条約調印後長崎英語伝習所開校し、米公使を通じてフルベッキに教授就任を要請した。フルベッキは 1860 年に伝習所改め洋学所（後の済美館）の英語教師として年俸 1200 ドルで採用された。授業は人気を博し定員 100 名を越える生徒が集まり、溢れた生徒を塾頭の何礼之が私塾を開設して引き受けるほどだった。

[佐賀藩洋学校致遠館]

フルベッキの生徒だった佐賀藩の大隈重信、副島種臣が中心になって 1865 年に設立した佐賀藩の洋学校致遠館に校長として招聘された。幕府の学校より自由度のある致遠館ではフルベッキは英語に止まらず、聖書やアメリカ憲法、独立宣言、万国公法等幅広く教授した。薩摩藩や長州藩を含む他藩の生徒も受入れ、最終的には 100 名を超えた。岩倉具視長次男三男（具定、具経）や勝海舟の長男（子鹿）、消化薬タカジアスターゼの発明者高峰讓吉、読売新聞の本野盛亨、ドイツ医学導入を提言した相良知安もここに学んだ。（『佐賀県大百科事典』佐賀新聞社、昭和 58 年、p. 544）

[何礼之の私塾]

唐通詞何礼之³⁷が幕府英語学校の塾長に就任した文久 3 年（1863 年）には、同校の生徒数が定員（100 名）を超えていて、何は溢れた学生を収容するため自宅に私塾を開いた。塾長には自宅に同居していた前島密を据え、フルベッキを教授に迎えた。

③ 漢訳洋書輸入頒布

19 世紀前半に欧米のプロテスタント教団が中国等に宣教師を派遣する際、聖書や欧

³⁷ 何礼之：（がのりゆき）1840-1923、長崎の唐通詞の家に生まれる。幕府洋学校教師を経て、開成所御用係、文部少教授になった明治 4 年岩倉使節団に一等書記官、木戸孝允随員として随行、憲法調査

米文物の現地語訳とそれらを出版するための印刷所を各地に設けた。1816年にロンドン伝道協会からマラッカに派遣されたメドハーストの最重要任務は印刷所の開設だった。聖公会のリギンスは1859年長崎着任後に、上海の墨海書館（1843年メドハースト等が設立、ブリッジマンの「連邦志略」はここで発行された。）や寧波の美華書館（1844年米長老教会が開設）で発行された漢訳欧米文物の輸入頒布業務を行っていたが、同人が1860年病氣帰国後フルベッキがこの業務を引き継いだ。

取り扱い書籍は、聖書にとどまらず、「連邦志略」や「万国公法」はじめ、地理学・植物学・代数学・幾何学・米英国史・天文学・医学・宗教史等幅広く、1860年の取扱実績が書籍496冊、小冊子846冊に上った。フルベッキ自身も幕府や佐賀藩の洋学校の教材として多用した。また、後に副島種臣や福岡孝弟が「政体書」を起草するにも活用された。（高山道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社、1977年）

④ 海外留学の斡旋

慶応2年（1866年）、まだ公式に海外留学が許可される以前に、横井小楠の依頼で甥の左平太と大平の兄弟を、また福井藩主松平春嶽の依頼で藩士日下部太郎をアメリカ・ニュージャージー州のラトガース大学及び付属グラマースクール³⁸に斡旋したのが皮切りだった。

その後長崎・東京時代を通じてフルベッキは、驚くほど多数の留学斡旋を実現した。その中には岩倉具視の次男三男（具定、具経）や勝海舟の長男（子鹿）、あるいは米国に移った薩摩藩英国留学生なども含まれる。オランダ改革派ニューヨーク外国伝道本部のフェリス親子の積極的な協力を得て、同派のラトガース大学と付属グラマースクールへの留学が中心だった。

フルベッキの紹介状をもってラトガース等に学んだ留学生は、明治18年までに300

に当たった。『日本近現代史人名辞典』吉川弘文館、2001年p.295.

³⁸ ラトガース大学：1766年、オランダ系移民が中心になって、オランダ改革派の牧師を本国に依存せず、独自に養成することが主目的に、クウィーンズ・カレッジとしてニュージャージー州ニューブランズウィックに設立された。コロンビア、ハーバード、イエール、プリンストン等と共にアメリカ独立以前に英国王の特許で設立された8つのクウィーンズ・カレッジのひとつ。オランダ改革派のニューブランズウィック神学校は当初この大学に付属していた。大学の財政危機を救った寄付者ラトガースを記念して1825年にラトガース大学と改称された。

ラトガース大学で学監として横井兄弟や日下部太郎等の日本人留学生の面倒を見、その後来日して福井藩校や大 学南校で教えたグリフィスは、明治18年までにラトガース大学や付属のグラマースクールで学んだ日本人学生は300人に上るとしている。一方、岩倉使節団に随行した津田梅などの女子留学生はじめ日本人米国留学生の世話をした日本公使館雇いのC.ランマンは、明治元年から5年までの米国に留学した日本人学生は500人上るとしており、フルベッキやフェリスの貢献度が如何に大きかったかがわかる。岩倉使節団が米国訪問を終えて欧州に旅立つ時、ボストンの領事館にフェリスを招いて、岩倉具視と大久保利通連名の留学生支援に関わる感謝状を直々に贈ったことから窺がえる。石附実『近代日本の海外留学史』中公文庫、1992、pp.209.

羽田積男『日本の近代教育とラトガース大学』pp.118-133.

<http://www.chs.nihon-u.ac.jp/institute/human/kiyou/27/H-027-014.pdf>, accessed on Feb.28,2013.

人に上ると云われる³⁹が、オランダ改革派外国伝道局総主事フェリス親子の積極的な支援のお蔭でもあった。例えば、当時日本人の入学が禁じられていた海軍兵学校に勝海舟の長男子鹿を入学させるについては連邦議会上下両院の個別決議が必要だった。

以下はフルベッキが留学斡旋した一例だが、明治新政府の要人になる人材が多数含まれる。

横井左平太・大平兄弟：横井小南の甥、1864年坂本竜馬の手引きで勝海舟の神戸海軍伝習所に入るが、翌年閉鎖された後、1865年長崎済美館に移りフルベッキから英語を学んだ。1866年フルベッキの斡旋でラトガースのグラマースクールに留学するが、幕府の渡航・留学解禁前だったため変名での密航留学だった。留学資金は横井小楠の弟子徳富一敬（蘇峰・蘆花の父）が実家から調達提供した。初めての日本人留學生の受入実現についてはオランダ改革派外国伝道局総主事フェリスが不足資金の募金も含めて懇切に面倒を見た。これを皮切りに、以後続々とラトガースに留學生が送り込まれ、その総数は幕末・明治初期の海外留學生の半数に上った。

左平太は1869年に薩摩藩英国留學生だった松村淳蔵と共にアナポリス海軍兵学校に転校する。日本人の入学が禁じられていた米国の兵学校に入学できたのは、フェリスが動いて米国上下両院の個別決議を取得出来たからだった。

大平は結核のため1869年帰国、熊本洋学校の設立に尽力し、フルベッキに外人教師斡旋を依頼する。しかし、キャプテン・ジェーン着任した1871年に大平は病没した。なお、小楠はフルベッキを長崎の自宅に訪ね西洋事情等を聞いていた。横井兄弟を嚆矢に、ラトガースに留学するものが相次いだ。

日下部太郎：福井藩士、横井兄弟同様済美館でフルベッキから英語を学んでいたが、1866年海外渡航が解禁されたのを受けて、藩主松平春嶽の命で1862年ラトガースに留学する。グラマースクールで当時学生だったグリフィスから英語・ラテン語を学んだ後、大学2年に編入されるが、成績極めて優秀で首席を通した。1780年卒業目前で病死したが、大学は卒業と認め、名誉あるファイ・ベータ・カップ会員にも推挙された。グリフィスがその後福井藩の洋学校教師として来日するきっかけは、この日下部との出会いだった。

岩倉具定・具経兄弟：岩倉具視の次・三男、長崎致遠館を経てラトガースに留学。

服部十三：岩倉兄弟に随行、ラトガース大学を卒業。帰国後岩手、広島、長崎、兵庫
県知事。

折田彦一：岩倉兄弟に随行、プリンストン大学卒業。帰国後三校校長。

山本重輔：岩倉兄弟に随行、ラトガースを経て、ニューヨークのレンセラー工業学校
卒業。帰国後工部省高山寮、日本鉄道会社技師長。

勝小鹿：勝海舟長男。ラトガースから松村淳蔵と共にアナポリス海軍兵学校に転校

高木三郎：勝小鹿に随行、ラトガース留学、米公使館書記官、養蚕業振興。

富田鉄之助：勝小鹿に随行、後日本銀行総裁、東京府知事。

高橋是清：勝小鹿に同行、米国到着早々奴隷扱いされて翌年帰国、フルベッキが大学
南校時代に森有礼に託され高橋是清を自宅に預かる。後大蔵大臣、総理大臣）、

³⁹ 『近代日本の海外留学史』（前掲）pp. 210-211.

鈴木知雄：勝小鹿に同行、高橋是清と共に奴隷扱いされて翌年帰国、後日本銀行出納局長

畠山義成：薩摩藩英国留学生、アメリカの T.L. ハリスのキャンプ⁴⁰を経て、ラトガース大学に入学、その後岩倉使節団に現地参加。帰国後東京開成学校（現東京大学）初代校長。

松村淳蔵：薩摩藩英国留学生、アメリカの T.L. ハリスのキャンプを経て、ラトガース大学に入学。その後勝小鹿と共にアナポリス海軍兵学校に転校。帰国後海軍兵学校長、海軍中将。

吉田清成：薩摩藩英国留学生、アメリカのハリスのキャンプを経て、ラトガース大学に入学。アナポリス海軍兵学校を目指すが断念。帰国後大蔵小輔、米国公使、農商務大輔など。米国公使の時、寺島外務卿の下で条約改正交渉に従事。

ラトガース留学生が並外れて多いのは、フルベッキ以外にもオランダ改革派・ラトガース大学人脈が多数来日していたこと（最初に来日した三人に続いて、バラ、スタウト、クラーク等の宣教師、福井藩校教授に招聘され、後大学南校に転じたグリフィス、文部省顧問として招聘されたモルレー、2代目米国特命全権公使のブルイン等）と、受入側のオランダ改革派外国伝道本部総主事フェリス父子の積極協力に負う所が大きい。

⑤ 活版印刷技術指導者の斡旋

通詞仲間と蘭書復刻を行っていた長崎のオランダ通詞本木昌造は、1855年印刷技術向上のため長崎奉行に上申し活版判摺所を設け自ら御用係になった。本木は印刷技術向上のためフルベッキに人材斡旋を依頼し、1869年に上海の美華書館⁴¹の印刷宣教師ウィリアム・ギャンブルが招聘された。ギャンブルは長崎製鉄所付属活版伝習所で、従来の「流し込み法」に代わる、「電胎法」という高度な活字鑄造法と組版技術を指導して、日本文字活版印刷技術の確立に貢献した。

5. 東京時代（1869年(明治2年)39歳～1898年(明治31年)68歳)

長崎滞在10年後の明治2年（1869年）4月、新政府太政大臣三条実美から開成学校

⁴⁰ T.L. ハリス (Thomas Lake Harris, 1823-1906) : キリスト教神秘家。ピューリタンの英国家庭に生まれ、5歳でアメリカに移住。ニューヨーク州にキャンプ The Brotherhood of New Life (新生兄弟社) を創設。1859年の英国講演旅行に知り合ったオリファント (Laurence Oliphant, 1856年アロー戦争英遠征軍司令官エルギン伯の秘書、1861年在日英公使館一等書記官、第一次東禅寺事件に遭遇、1865年英下院議員、薩摩藩英国留学生がロンドンのオリファント邸に出入りしていた。) を通じて、1967年薩摩藩英国留学生6名 (森有礼、鮫島尚信、長澤鼎、吉田清成、畠山義成、松村淳蔵) を米国のコロニーに招いた。『日本キリスト教歴史大事典』(前掲)。

⁴¹ 美華書館：1844年アメリカの長老派教会が聖書や欧米文物の翻訳出版のためマカオに開設した印刷所で、その後上海に移転した。1858年にギャンブルが5代目館長として着任後拡張され、ロール式印刷機4台や蒸気タービン、活字組版などを有する上海最大規模の印刷工場になっていた。明朝体はギャンブルが開発した。フルベッキは来日前、上海寄港時にギャンブルと会っていた。

プロテスタント各派は聖書やその他文献の中国語訳やそれらの印刷・刊行に力を入れていたが、これらの刊行物が、フルベッキが長崎の幕府や佐賀藩の洋学校、あるいは東京の開成学校・大学南校で教える際の教材、あるいは政府顧問として欧米事情を紹介する際の文献として大いに役立った。古賀十二郎『長崎洋学史（上巻）』長崎文献社、昭和41年、pp.721-730。

⁴²教師兼政府顧問として破格の条件で⁴³東京に招聘された。新政府には岩倉具視（輔相・大納言）、鍋島直正（参与・大納言）、副島種臣（参与・参議）大隈重信（参与・参議、民部大輔、大蔵大輔）、大木喬任（議長・民部大輔、民部卿、参議・初代文部卿兼任）等フルベッキの顔馴染みが数多く重要ポストを占めていて、彼らの推挙があったもの。

①開成学校教師・大学南校教頭

開成学校は幕府の洋学研究機関開成所を受け次いで1868年発足、1869年2月に開講した。1870年7月の組織替えで大学南校となり、フルベッキは教学部門トップの教頭に就任した。明治6年はじめには500名前後の学生と4カ国18名の外人教師の世話で多忙を極めた。明治3年に貢進生制度が実施されると、大学南校には全国259藩から310名が推薦され大学南校に入学する。福井藩校にいたグリフィスが、廃藩置県後同校に転じた頃には、学生数は1000人に上り、全員が下駄履きで2本の刀を差してくる姿に驚いている。海外留学規則が定まった翌明治3年からは大学南校からも海外留学生在が派遣された。

明治5年福沢諭吉の紹介で大学南校監事(事務長)に着任した九鬼隆一は、後に文部省に入省し文部少輔(次官)となり「九鬼の文部か、文部の九鬼か」と云われる活躍をするが、大正8年墓所に巨大な「景慕碑」建て、木戸公、大久保公、岩倉公、福沢先生、加藤弘之先生に並べてフルベッキ先生の名を掲げ、「尊霊」としている。⁴⁴

なお、後に総理大臣になる高橋是清は外国官権判事森有礼の書生だった時代に大学南校に入学しフルベッキの教えを受けるが、森有礼が代理公使としてアメリカに赴任する際に後事を託されたフルベッキは、高橋是清を書生として自宅に引取り、公私の面倒をみた。

②「公議所」公議人、「元老院」顧問に就任、国の重要問題を諮問

国政の重要問題を討議する場として1869年3月開所した立法諮問機関「公議所」には、各藩、政府の各官、諸学校から公議人が1名ずつ選出された。フルベッキも政府の公議人として列席するとともに、随時太政官職員からの相談に応じていた。1875年左院の廃止により、新設の元老院顧問に転じた。

③「政体書」起草を指南

伏見の戦い、江戸城開城を経て関東以西をほぼ掌握した新政府は、1868年6月（慶応4年/明治元年旧暦閏4月）に明治初期の政治大綱・統治機構に関わる「政体書」を發布し、三権分立を建前とする新たな官制を定めた。これは副島種臣が三条実美と岩

⁴² **開成学校**：1855年の幕府洋学所から始まる洋学と外交文書の翻訳のための学校が、明治になって改称・発展したもの。後に大学南校を経て東京大学になる。大久保利謙『明治維新と教育』吉川弘文館、昭和62年、p.186.

⁴³ フルベッキの月給600円は右大臣岩倉具視と同等、参議大久保利通の500円を上回っていた。片野勸『明治お雇い外国人とその弟子たち』新人物往来社、2011年、pp.346-347.

⁴⁴ 藤田裕彦「波切九鬼氏のなぞ刊行へ」『ぶん・ボラ通信第26号』三田市教育委員会文化財ボランティアさんだ、2006、pp.2-3. 北康利『九鬼と天心』PHP研究所、2008、PP.28-56、PP.297-298.

倉具視に提案し、議事政体所御用係の福岡孝弟と共に、アメリカ憲法やブリッジマンの『連邦志略』（A Short Account of American History）、福沢諭吉の『西洋事情』あるいはホイートンの『万国公法』などを参照して起草した。漢訳洋書はフルベッキが中国から輸入頒布していたものであり、副島は長崎の致遠館で大隈などと共にフルベッキからそれらの教えを受けていた。⁴⁵

④新設医学校にドイツ医学採用を建言：

相良知安（佐賀藩、藩主鍋島直正侍医）と岩佐純（福井藩、藩主松平春嶽侍医）は、1869年1月明治新政府から徴士「医学校取調御用係」に任じられ、医学校創設に取り組んでいた。二人は長崎で蘭医ボードウィンに学んだ際にドイツ医学の優位性を教えられていたため、新しい医学校にはドイツ医学を採用することを建議した。

一方、文教の責任者山内容堂（土佐藩）や西郷隆盛（薩摩藩）は、戊辰戦争の傷病者治療で世話になった英医ウィリス（英公使パークス医官）を医学校総教師に取り立てる約束をするなど、イギリス医学採用に傾いていたため、相良等の建議は難航した。

この局面を打開するため相良は長崎致遠館時代の師で、当時太政官顧問だったフルベッキから「ドイツ医学が最も優れており相良等の建議を支持する」との文書回答を得て、1870年にドイツ医学の採用が決定された。⁴⁶

草創期の軍医制度を確立し1890年に軍医総監になった石黒忠恵は、明治31年（1898年）フルベッキの葬儀に参列した後、新聞「天地人」に以下の様に寄稿し、フルベッキの功績を称えている。「医師の岩佐、相良、長谷川（泰）と私は、医学はドイツ式という見解を有していたが、日本の教育は英米にならうべきというおおかたの意見の中であざ笑われていた。我々の意見にフルベッキ博士が共感し、彼の政府への助言によりドイツ人教師を雇い入れることになった。現在の医学の繁栄は亡博士に帰するところが非常に大きい。これが私が博士の葬儀に参列した理由である。」⁴⁷

⑤文部省顧問として「新学制」制定を支援

1871年9月文部省が設立され初代文部卿に大木喬任就任し、翌年「学制」取調べ係りを任命する。筆頭の箕作麟祥はフランス法の翻訳で、次席の岩佐純はドイツ医学採用建言で共にフルベッキの世話になっていた。大木自身佐賀藩徴士で、大隈重信や副島種臣らと藩校で共に学んでいたこともあってフルベッキと親しかった。フルベッキのブリーフ・スケッチに基づく岩倉使節団の海外教育事情視察は重要項目で、文部省から文部大丞田中不二麿等6人が派遣されていた。そしてその1人文部権小丞中野永元は致遠館以来のフルベッキの愛弟子である。「万国学制の最良なるものを採用する」方針で、人口を基準に全国を八学区に区分し、各学区に大学一校、中学校は総数256校、小学校は53760校（600人に一校の割合）とする国民全てを対象とする近代学校制度が新学制として明治5年に布告されたが、フルベッキは1871年9月に設置された文

⁴⁵ 中村哲『明治維新』集英社、1992、pp55-60.

⁴⁶ 『近代西洋医学発祥から現在まで（長崎大学医学部創立150年記念誌）』2009、pp. 48-49.

⁴⁷ グリフィス著、村瀬寿代訳・註『日本のフルベッキ』、洋学堂書店、2003、pp. 203-204.

部省の事実上の最高顧問として教育政策の諮問に応じていた。⁴⁸

⑥初期法制の諮問・各国法翻訳出版

大学南校教頭辞任後フルベッキは正院法制課及び太政官翻訳課に転じ、法制の諮問と外国法の翻訳に当たった。「フランス森林法」の翻訳は明治十五年に刊行された。また、元老院議員の要請による「ゼルマン議院之法」は1876年12月翻訳出版された。日本の専売特許条例は高橋是清がアメリカ特許庁を訪問して1885年に制定されるが、それに先立ってフルベッキがアメリカ特許法を翻訳済だった。

⑦不平等条約改正に備えた海外視察団（岩倉使節団）派遣を提言

条約改正期限を控えて、対応に苦慮する政府首脳・官僚は、政府顧問のフルベッキを質問攻めにするが、政府首脳・官僚からなる大規模政府海外視察団を派遣すべきとして、団員構成、訪問国、訪問順路、交渉手順、調査内容、調査班編成、調査報告書記載要領に至る詳細な企画書（ブリーフ・スケッチ）を作成し、1869年6月大隈重信に提出した。

しかし、大隈は直前に外国官副知事を辞していたことや、攘夷派の反発を恐れて公に出来なかった。2年後の1871年7月に参議・条約改正御用掛になった大隈は翌8月、自身が海外使節団を率いることを提案し一旦は了承される。この時作成された事由書はブリーフ・スケッチを参考にしたが、使節団の規模は大幅に縮小されていた。

一方、佐賀勢に主導権を奪われることを良しとしない公家の岩倉・薩摩の大久保・長州の木戸連合が大隈構想を覆し岩倉使節団に取って替える。岩倉は翌10月フルベッキにブリーフ・スケッチの再生を求め、岩倉邸で深夜に及ぶ逐条説明を受けた。政府高官を含む団員編成、調査内容・訪問先、訪問ルート、役割分担等ほぼその線に沿って決まり、廃藩置県4ヵ月後の1871年（明治4年）11月（旧暦）、右大臣岩倉具視を特命全権大使、参議木戸孝允、大蔵卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尚芳を副使とする大使節団（使節だけで46名、随行者・同行留学生を含めると107名）が、条約締盟国12カ国を10ヶ月かけて訪問・視察すべくしゅっぱつする。（実際には1年10ヶ月632日に及んだ）。

また、木戸家文書「一米人フルベッキより差出候書」によれば、帰国後の報告書作成要領まで細かく指南しており、明治11年に刊行された久米邦武編「特命全権大使米欧回覧実記」全100巻はそれを忠実に踏襲していることが分かる。⁴⁹

⑧切支丹禁制の高札撤去を実現

慶長19年（1614年）に実施されて以来262年続いていた切支丹禁制の高札が、1873年（明治6年）2月24日付の太政官布告によって撤去された。

⁴⁸ 森秀夫『日本の教育制度』学芸図書、昭和59年、pp.20-33.

⁴⁹ ・高谷道男『フルベッキ書簡集』新教出版社、1977年。

・田中彰校注『日本近代思想大系1 開国』岩波書店、pp.354-380.

・大久保利謙『岩倉使節の研究』宗高書房、昭和51年。

フルベッキは前出ブリーフ・スケッチの本文で「西洋の宗教を禁止した古い布告は廃止されるべきであり、従って自国の信者が法律を守り、公然たる罪を犯さない限り、迫害を受け、殉教に至らしめてはならない」と説き、さらに「宗教的寛容についての覚書」でも「いかなる国の国民も、自分自身の良心に従う宗教的信条と崇拜形式とを保持することが許されている」と岩倉使節団に説いていた。

1871年12月に出発した岩倉使節団は、最初の訪問国アメリカで大統領からも同趣旨の強い要求を受けたため改めて留守政府に検討を指示し、その後欧州滞在中に岩倉具視が電報で切支丹禁制の高札撤去を要請し、使節団帰国を待たず1873年（明治6年）2月高札撤去が実現した。⁵⁰

⑧旧約聖書の日本語訳

1887年明治文語訳の旧約聖書が日本語訳委員として担当した刊行されたが、フルベッキが訳した詩篇とイザヤ書は日本の文学者が見習うほどの名訳だった。以下は詩篇第53編の一部である。「おろそかなるものは、その心のうちに神なしといへり。かれらは邪にして憎むべきとがをなせり。善きを行なう人なし。」「神は、さとき者と神をとがむるものと、あらやあらぬやを見んとて天より人の世を見下したまへり。」⁵¹

⑨明治学院創立に参画

米長老教会、米オランダ改革教会とスコットランド一致長老教会の三派が協力して1877年立ち上げた東京一致神学校等を母体に、1886年に明治学院が創設された。ヘボンやブラウンと共に創設に参画したフルベッキは初代理事に就任し、翌年神学部教授に、翌々年には理事会議長になった。1892年7月明治学院夏季学校で「日本初代の基督教史」を講義したが、出席した島崎藤村が白髪のフルベッキの印象を小説「桜の実の熟するとき」に書き残している。

⑩人材斡旋

・福井藩校明新館ヘラトガス大学のグリフィスを斡旋：

1871年3月福井藩松平春嶽の要請で、藩校明新館の教師にラトガス大学を卒業したグリフィスを斡旋した。グリフィスはラトガス大学在学中に付属のグラマー・スクールで教えていたが、福井藩留學生日下部太郎や横井兄弟、岩倉兄弟、勝小鹿、畠山義成等多くの日本人留學生の面倒をみていた。廃藩置県により藩校がなくなった後は、フルベッキから東京の大学南校教師に招聘された。

・熊本洋学校の教師にキャプテン・ジェーンズを斡旋：

横井小楠の甥横井大平は、フルベッキの斡旋で1867年ラトガスに留学したが、病気のため翌年帰国し、日本初の男女共学校となる熊本洋学校の設立に尽力した。軍人の外人教師斡旋を依頼されたフルベッキは、ウェストポイント陸軍士官学校出身のキャプテン・ジェーンズを紹介した。ジェーンズは1871年9月に着任し、数学、

⁵⁰ 高木慶子「キリシタン高札撤去の背景」『英知大学論集 41』pp. 20-22.

⁵¹ 『明治維新とあるお雇い外国人』（前掲） pp. 346-348.

英語、物理、化学、地理、歴史全ての教科を英語で教えた。

また、自宅ではじめた聖書研究会は、1876年の集会で35名が「奉教趣意書」に署名するほど盛んになり、札幌・横浜と並ぶ日本プロテスタントの三大源流となる熊本バンドに発展する。しかし、これが保守派から咎められ学校は同年閉鎖された。教師生徒は新設間もない新島襄の同志社英語学校に集団疎開し、同志社の一大勢力になり、横井時雄（横井小楠の長男）が第3代の、海老名弾正が第8代の同志社総長に就任している。

⑩勲三等旭日章受章・引退・永住権取得

明治6年(1873年)6月文部省学監としてラトガース大学から文部行政の専門家モルレー(David Murray, 1830-1905)が招聘されると、フルベッキはもはやアマチャーで足りる時代では無くなったことを自覚し引退を決意する。

政府はこれまでの貢献を謝し正院の翻訳事務の仕事を用意したが、1877年7月天皇の勅語と勲三等旭日章を受賞した2ヵ月後に政府との契約は終了した。

1890年アメリカに一時帰国して米国籍取得と日本行きの旅券を申請したが、拒否されたため1891年2月日本に戻り、アメリカ公使の口添えで青木周蔵外務大臣を訪問し、無国籍問題について配慮を要請した。同年7月後任の榎本武揚外務大臣から日本への貢献大として国内自由旅行の特許状が交付され、事実上の永住権を認められた。

⑪葬儀・記念碑建立募金活動

1898年東京赤坂の自宅で心臓発作のため急逝した。享年68歳。棺は政府派遣の近衛儀仗兵に守られて、都が用意した青山霊園に葬られた。翌年フルベッキに学んだ有力者が発起人となった募金により青山墓地に記念碑が建てられた。その記念金募集趣意書⁵²には高橋是清、副島種臣、前島密等著名な人39人が名を連ね、最大級の賛辞、謝

⁵² 故フルベッキ先生記念金募集趣意書：

「故勲三等神学博士フルベッキ先生は文久元年（安政六年の誤り）初めて長崎に渡来し、日本語学習の傍ら、長崎洋学所済美館並肥前藩校の教師に聘せらる。当時天下の有志者は、海外の事情に通ずるを以て急務と為して、概ね長崎に来遊し、先生に就いて学ぶ所あり、問う所あり。語学、数学より、陸海軍工技法政の諸学に及ぶまで、講述解説夜以て日に継ぎ、循々として倦色を見ず。愈々其博識に驚き、其懇篤に服せり。其中、今日朝野知名の士多し。明治二年大学南校の教師に徴せられ、同五年太政官の法律顧問と為り、更に元老院に転じて、法典の翻訳及調査に従事し、又学習院の教師と為る。同十年政府雇を解き、特に勲三等に叙し、旭日章を賜りたり。

（中間略）先生は我国に渡航せしより、殆ど40年、その間文明の新機運を催進したる功德の著大なるは、今更に賛辞を措くを要せず。その知識の該博なる、その言行の温厚なると、我国に竭せる勤労とに至手も、先生の履歴これを証して余りあり。」（以下略）

明治三十一年九月

右発起人：伊沢修二、稲垣信、細川護成、本田庸一、岡田好樹、蘆高朗、細川潤次郎、大木喬任、大儀見元一郎、和田秀豊、何札之、高田早苗、石丸安世、菊池大麓、三橋信方、本野盛亨、曾我祐準、津田仙、中島永元、谷森真男、高橋是清、副島種臣、辻新次、長岡護美、永井尚行、九鬼隆一、柳谷謙太郎、松井庸之助、渡辺洪基、加藤弘之、吉井亨、牟田豊、蔵原惟郭、前島密、高良二、目賀田種太郎、白峰駿馬、杉亨二、鈴木知雄（以上）。

『明治維新とあるお雇い外国人』（前掲）、pp. 368-370.

意が込められた。

7. 結び

フルベッキが、本来の伝道活動より以上に、教師あるいは明治政府顧問の活動に重きを置き、積極的に日本の近代化をリードしていた有様を見てきた。工業学校と神学校という偏った教育しか受けてないフルベッキがここまでなしたことには驚嘆させられる。又、幕末維新の日本の指導者達が、日本の近代化が喫緊の課題と理解し、切支丹禁制かで攘夷派が敵対する中、躊躇無くキリスト教の宣教師を師としたことも特筆される。以下の諸点がフルベッキ成功の諸要素と思われる。

① 個人的資質

- ・鎖国時代も例外的に交流のあったオランダ人だったこと。
- ・蘭独仏英の4ヶ国語をこなし、工学知識もあり、分野を問わず相談に応じられた。
- ・来日1年後に日本語文法書を出版できるほど短期間で日本語をマスターし、流暢な日本語で会話が出来た。誠実で秘密を守ったので、政府要人の安心感があった

② 豊富な人脈

- ・生まれたオランダのザイストが、海外布教を積極推進し、他宗派への影響力もあったモラヴィア派のセンターで、19歳のとき、モラヴィア派の教会で中国伝道士ギュツラフに接していた。モラヴィア派牧師の義弟の招聘でアメリカに移住し、モラヴィア派モデルタウンの開拓者タンク師の工場で働いた。
- ・宣教師を志して以降はオランダ改革派で中国伝道経験豊かなブラウン牧師や同外国伝道局所初代総主事フェリス父子にめぐりあった。
- ・上海寄港時には、ブリッジマン、S. W. ウィリアムズ等中国伝道経験が長く、かつ日本も研究していた先輩宣教師との協力関係を築いた。
- ・赴任地長崎で、切支丹禁制下にも拘わらず、岩倉具視、鍋島直正、横井小楠、松平春嶽、勝海舟、大隈重信、副島種臣等佐賀人脈を中心に幕末維新で活躍した多くの要人に信頼され、協力を得られた。
- ・オランダ改革派・ラトガース大学から有能な多くの人材が送り込まれた。

③ お雇い外国人の少ない時代

開国直後で、英学転向が急がれていた時代だったが、まだ専門家がほとんどいなかったため、専門教育を受けてはいないが、博識で日本語を含む多言語をこなすフルベッキが大いに頼りにされた。

④ プロテスタントの布教方針

プロテスタント教会の布教が信者数の増加を急がず、聖書の現地語訳、欧米文物の現地語訳出版そのための印刷宣教師派遣、宣教医の派遣、学校経営等欧米キリスト教社会の理解を優先していて、その成果を活用できた。以上